建築藝術の機微を伺ふ

工事美談三種

東京帝國大學教授
工學博士　伊東忠太

1

桓武天皇は建築や土木の事について御知識も深く御研究心に秀でさせられた。この話しは天皇が奈良より京都へ都をお遷しに成つた時の話しである。

京都の有名な建築家が御所の應天門を建築するべき大役を仰せつかつた、建築家は最全の努力を持つてその門の工事にあたつて居た或る日天皇がその作業場をお通りに成つて出來かゝつて居る門を御覽になつて、これは一尺程高すぎるとおほせられた。しかしどうもその大工は高いとは思はれないが勅命であるからどうしても低くしなければならないと思つて、五寸だけ低くして又仕事を進め、先づ立派な門が出來上つた。天皇はその出來上つた門を御覽になつて、先に一尺高すぎると言ふたが、まだ五寸高い、一尺五寸低くすれば好つた、惜しい事をした、今にわざわいがなければよいがと仰せになられた。そこでこの大工が非常に恐れ入つたと言ふ事である。其の後何年かたつて大暴風雨がありその門は倒れてしまつた、この話しによつて桓武天皇のいかに建築に對し微細な所まで御注意なされて居たかと言ふ事を御すいさつ出來る次第で誠に感服すべき事であると思ふ。

2

東京下谷に廣德寺と言ふ寺がある、そこに昔から有名な山門があつた。今は大正の大震災の爲めに燒失して跡形もなくなつてしまつたが江戸の名物として知られたこの山門は江戸時代のある有名な大工が建てたものであつた、彼は非常な熱心家であり又精神的な人物であつた。彼は彼自身の全努力を投げ出してこの山門を建築した。彼はその出來上つた山門を見て、先づこれで立派なものだと云ふ自信を得て安心した。

ところが當時の或る人々はその山門を見て此は良く出來たが少し低い樣だ、惜しい事には一尺程低い、と噂をしだした。

自分が最善の技術で眞心こめて造り上げた此の山門に缺點などある筈はないと思ふけれども、あまりに低い々々と云ふ評判が高くなつたので、自分も毎日山門の前に出掛けては其高低の構造を眺めた。

是が一尺低いかナー

と彼は自分の胸に聞いて見た、

一尺低いかナー

毎日彼は山門を眺めてはツブやいた、

一尺低いかナー

幾日か山門の前にたゝずんで、一尺低いかナーを繰返し々々してをる内に遂に彼は病の床につく樣になり、一尺低いかナーを口にしながら不歸の客となつた。

其後は山門の噂もなかつたが、間もなく安政の大地震があつて江戸の被害は大した者であつた、廣德寺の附近も家屋と云ふ家屋は悉く倒れた中に此の山門のみは無事であつた。

世人は初めて驚嘆した、あの一尺低いと思はれた理由が此時わかつたのである。

其後此の廣德寺の山門は江戸の名物となりいやしくも大工の棟梁たらん程のもので此の山門を知らぬものはなかつた。惜しい事には大正の震災で燒失した事である。

3

明治の中年頃であつて、東北本線の工事が始まつて利根川に鐵道橋を架設する時の事であるが、此の工事の主任であつた一人の若い工學士があつた。彼は非常な精神的な人で又

努力家であつた。彼は自分の職務に對して充分な自信を持ち、最全のベストを盡して此の工事を進めて居た。しかし其の當時は今の樣に技術に於ける進歩もなければ、又諸設備においても全く幼稚な物であつた。又鐵道が始まつて間もない事で此の樣な橋梁の大工事は全く困難とも言はれるべきものであつた。

まだ工學と言ふものが今日の如く進歩して居らなかつた頃であるから、工事が出來上つた後に、汽車を通して始めてこれで完全だと言ふことが斷定された位ゐのものであつた。斯んな時代の工事であるから其の若い工學士の心中たるや實に察すべきであつたと思ふ、然し幸にして仕事も天候も順調に進んで行つた、若い工學士も内心非常によろこんで居た、斯くて工事は七分通り出來上つた。

が丁度秋にかゝり折惡く利根川一帶に大豪雨があつた。川は增水し始めた。天候も益々險惡になつて行つた。學士は自分の魂を入れて築き上げた此の橋が如何なる影響をうけるかと氣づかつてゐた。その後數日經つて天候の恢復を見た、しかし水は依然として減じなかつた。學士は心配の余り橋の上に立つてたゞ水面を注意深くながめてゐた。水はもの凄く橋の土臺の所でぐるぐる渦卷いて居た。彼の目にはその橋の土臺がぐらぐら動き初めたやうに思はれた。何物もわすれて身を投じた彼はその土臺に抱きついて離れなかつた。皆の者がとめた、しかし學士には聞えなかつた、その後水の流れがおだやかになつて學士は安心した物かふらふらとして橋の上にあがつて來た、皆人は色々と手を盡くして介抱した、而して何故あんな危險な事をしたのかと尋ねると、學士は

私の全力を注いで築きあげたこの橋が萬一流れてしまう位なら、自分もこの橋と俱に流れはてやうと覺悟してゐた、

と言つた此の事を聞いた時、あたりの人々は皆この學士の工事に對していかに自分の有る限りの力を集注して熱心に築きあげてゐたかと言ふ點に深く尊敬の意を表したと言ふ事である。

東京帝大建築學教授室にかける　伊東忠太博士

Dr. C. Ito. At The Tokyo Imperial University.